

平成24年1月31日

ホスピス・緩和ケアフォーラム報告書

開催日時：平成24年1月8日（日）開場12：00、フォーラム13：00～16：20

会場：沖縄都ホテル2階綾羽の間

主催：公益財団法人日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団(<http://www.hospat.org>)

共催：琉球大学医学部附属病院がんセンター(<http://www.ryukyucc.jp>)

後援：沖縄県がん診療連携協議会(<http://www.okican.jp>)、沖縄県、沖縄県医師会、沖縄タイムス社、株式会社琉球新報社、沖縄テレビ放送株式会社、琉球朝日放送株式会社、琉球放送株式会社

参加者：一般（295名）、患者会（沖縄県がん患者会連合会、宇宙船子宮号）、裏千家淡交会沖縄支部おもしろ青年部（8名）、琉大病院がんセンター（10名）

呈茶：一般参加者の中の希望者（147名）に対して菓子と薄茶をお出しした

プログラム

特別講演13：00～14：10

演題「たまきはる命の行方」

演者：玄侑 宗久師（作家・臨済宗福聚寺住職）

座長：増田 昌人（琉球大学医学部附属病院がんセンター長）

シンポジウム14：20～16：20

「がんになったら」～ホスピス、在宅、病院でできる、それぞれの支え方～

座長：笹良 剛史（友愛会南部病院麻酔科医長）

14：20 命をつなぐホスピスでの支え方

池永 昌之先生（淀川キリスト教病院ホスピス科部長）

14：40 治療/緩和ケアと生活をつなぐ看護師の役割

小山富美子先生（近畿大学医学部附属病院がん看護専門看護師）

15：00 沖縄の在宅ケア

喜納美津男先生（きなクリニック院長、那覇市医師会理事）

15：10 沖縄のホスピスの現状

大湾 勤子先生（国立病院機構沖縄病院緩和医療科医長）

15：20 総合討論（～16：20）

※総合司会：栗山 登至（琉球大学医学部附属病院がんセンター）

シンポジウム質疑応答

Q. 1（座長 笹良医師からの質問）：患者に病状を告げることに對して、不安や負担を抱える患者家族

へどのように対応するかについて

A. 池永医師：普段から患者本人がどのような考えを持っている人かを知ることが大切。告知といっても、本人がどの程度までの情報を知りたいのか把握する。全部知りたいタイプなのか、それともそれほど直接的ではなくオブラートに包んだ表現を好むタイプなのかなど人それぞれ違うと思う。ただ、最後まで家族として支えたいと思うのであれば、命に関わる病気であることをきちんと伝えることが患者さんを孤独にさせないために大切なこと。告知をしたうえで、一緒に辛さを分かちあうことが大切であると、普段の診療では家族に伝えている。

A. 小山看護師：家族の不安と負担の軽減をサポートするために、段階的に訪れるであろう問題点を見越して患者家族とコミュニケーションをとっている。

A. 喜納医師：現在の在宅ケアに関しては、告知されていない方に対して告知を勧めたり、告知をしたりはしていない。

A. 大湾医師：そもそも告知をすることが大事なことなのかどうか。それよりも、告知の仕方や伝える側の言葉の問題が大きいと思う。患者さんとの関係性を大切にして、医師側も一緒に辛さを感じているということを伝えることで、こちらの思いが伝わると思う。

Q2. フロアからの質問

(沖繩協同病院心療内科の医師から)：告知されていない末期がん男性の奥さんから、患者本人と周りへの気遣いとで板挟みになって苦しいとの訴えがあったが、このような時はどうすればよいのか？

A. 小山看護師：それぞれが思っている告知とは何か曖昧なところがある。まず、一言で告知といっても、どういうことを知らされたくないのか、なぜ、そう思うのかなどの経緯を聞くことが大切。また、患者さん自身は何が知りたいかも重要。患者さんがどういうタイプの性格かで対応を考えた方がよい。

Q3. フロアからの質問

本人に治療の方法がもうないと伝えたいが、伝えるべきなのか。また、治療ができないと病院から追い出されるのか。

A. 池永医師：余命を伝えることが大事なことであるとは思わない。それよりも、残された時間で現実的に何が出来るのかを考える方がよいと思う。たとえば、1～2か月ほどの余命と予測される患者さんが、半年先の子供の入学式に出ることを望んでいる場合は実現不可能かもしれない。それよりも、1か月単位で病状が変化するのであれば、まず、この一か月をどうするか考えようと提案するのが良いのではないか。自分の体が動かして、したいことが出来るであろう期限を伝えて計画を立ててみてはどうか。本人がどんな望みを持っているのかを確認して、今の病状や体力的なことを踏まえたうえでどういったことができるのかを一緒に考える。常に前向きに希望を持ってもらうのがよい。

A. 治療ができないと伝えることはほとんどない。治療にはいろいろなあり方があるので、ケース・バイ・ケースで対応していくものである。ただ、抗がん剤を使うか使わないかなどの具体的な治療の場合は、今の段階では少し休みましょうということはある。

「治療ができなくなったら病院から追い出されるのか」という質問に対して、多くの患者さんやご家族がそのような不満を感じているというのが現状。憤りは感じるが、今の日本では、国が病院を格付けしており、各病院の働きを決めてしまっているので、患者さんをずっと見ていくことが出来ない。治療ができなくなったから次の病院へという安易な考えではなく、患者さんのためを思って転院を進めるのだが、忙しい現場の中で、主治医の言葉が足りないばかりに患者さんやご家族にそのような印象を与えてしまうことが多いのも現状であると感じる。

